

## 台湾 — 台東聖山「都蘭山」に登る

佐々木 健之

### ■登る山の選定まで

3人グループで2007年の正月は台湾の山へ行こうと考えた。台湾には3000mを越える高峰がたくさんあり、常緑樹で覆われたエメラルド色(そう思った)の山々は、夢を誘った。どこを登ろうか? 毎度の軟弱登山隊なので、高望みをしてはいけない。乏しい情報を集めた末、ややがんばった案で台湾での最南端3000m峰「北大武山(3092m)」にねらいを絞った。その山は途中の山小屋で一泊すれば、翌日には山頂に立てるらしい。台湾最高峰の玉山などは4000m近いから冬は降雪の心配があるが、「北大武山」は3000m台やっただし台湾最南部の位置からすると積雪はまず無く、冬の天気も割合とよい。ひとまず場所を選定して安心していましたが、具体的に調べ進むと、台湾では3000m以上の登山には入山許可証が必要とか、正月は台湾も3連休になり山小屋が混雑するなどうれしくないことも分かっ

た。山の混雑は日本で十分味わっているのもういい、「北大武山」は諦めた。

新たに目標を選定。登山道があり日帰り、冬の天気がよく見晴らしが良さそうなところをインターネットで探した。少ない候補から消去法で残ったのが「都蘭山(1190m)」だった。この山は台湾東海岸の台東市近くにあり、海岸からすぐにそそり立っている。海と反対側の山腹は「卑南大溪」という大河に削られてこちらもけわしい。南北にのびる痩せた尾根上に頂をいくつか並べた山なみである。高さは物足りないが、一等三角点とのことで、きっと風格のある山に違いないと希望的に思いこんだ。

具体案を練っていると、同行するSさんの知り合いから台湾の山岳会を紹介してもらった。その結果、ありがたいことに台湾台北の「CT 溯溪会」会員の麗雲女士(少し日本語ができる、

来日経験8回)が我々に同行してくれることとなった。易しいハイキングの山を、沢登りが専門の山岳会に案内してもらうのはずかしいのだが、成り行きでそうってしまった。

台湾の山というと、日本では「玉山(昔の新高山)」が有名でほかの山はほとんど知られていない。わたしも知らなかったが、九州より小さい台湾には3000mを越える山が200座以上もあるのだ。日本には「日本百名山」という山の格付け聖書があるが、台湾にも「台湾百岳」と呼ぶ選ばれた山々があり、その選定基準は高度1万フィート又は3000m以上の山というから壮観だ。さらに各山地を代表する「五岳」や、尖鋒を集めた「三尖」など、名山群のいろいろなたたえ方がある。

それとは別に誰でも登れる低山を選んだ「台湾小百岳」という分類があり、「都蘭山」もこれに入っている。

### ■都蘭山の台東市へ

台北在住の麗雲さんとは高雄の飛行場で落ち合った。麗雲さんは短髪の似合う小柄な女性で、気取らない人だった。外見からは、難度の高い沢登りをするような人には見えなかった。

しかし、登攀中に落石を顔面に受け、前歯1本を欠いてしまったようで、なかなか厳しい山登りをやっていたようだ。前歯は修復したので見た目では何ともない。彼女は食べ物の嗜好がおもしろく、ニンニク、香菜、唐辛子など刺激物、強い香りがダメ。それでも台湾人かねー、といいたくなってしまふ。

2006年12月31日、高雄駅07:11発「莒光号91」に乗車。台湾南部の線路は、峠越えの山岳鉄道となり、変化があって楽しい。台東駅に10時ちょうど到着。

麗雲さんの所属するCT 溯溪会は高山なら詳しいが、台北から離れた低山の都蘭山などは眼中にないので不案内である。そこで会長の荘さんは、大事をとって地元の案内人、廖氏に案内を依頼してあった。廖氏は静かな物腰の退職教職員で、彼とは台東駅で落ち合う約



「CT 溯溪会」からプレゼントされた「台湾百岳」のバンダナ。これを土台に地図を作った。中央にゴマのようにみえるのが「百岳」の位置。



海岸の小公園からみた都蘭山、どれが頂上がよく分らなかった



根節蘭と教えられたラン

束になっていた。こういった経緯は、登る当日になって麗雲さんから聞いた。

麗雲さんも廖氏とは面識がないので下車するとすぐに携帯で連絡をとりあい、駅前広場で落ち合う。麗雲さんは廖氏を「老師」と呼びかけたので、この文も「廖先生」としておこう。廖先生の車は新しいスズギの四駆で、これに我々の手荷物などを積み、最初にその日晩泊まる「台東公教會館」へ行った。

駅から10分ほどの中心街にある「台東公教會館」は公務員を優遇して泊めるところであるが、一般客も泊まれる。外観は普通のホテルと変わらない。手続きのため中に入ると、高年配のフロントマンが日本人かと訊いてきて、「雨降りお月」やわたしの知らない軍歌を日本語で披露。自分らで荷物をホテルの部屋へ運び、山の荷物だけを持って登山口へ向かった。

低い家並みが続く台東市の街並みはすぐにとぎれ、国道を北上する。10分ほど行くと道路沿いにある海辺の小公園に車を止めた。そこからは湾曲した海岸線を前景に、切り立った山並みが望まれた。これが都蘭山か。

廖先生が山を見ながらコースを説明するという。といっても廖先生が中国語で話し、それを麗雲さんの大まかな日本語フィルターで引っ掛け、われわれに伝える。麗雲さんは専門のガイドではないので、廖先生の説明を日本語に言い変えるのは沢登りより難しかったかも？。彼女は普段は「台湾語」の生活をしているので、「中国語」は得意でないらしいが、台湾に生まれた人は、生活に必要な語学を習得しなくては行けない。

コースであるが簡単に言えば、海岸から直線的に伸びている尾根を伝い、鞍部でいる。そこから主稜沿いに北上し、一つ目のピークが山頂とのことであった。山頂は一つ目のピークか二つ目のピークかよく分からなかったため、折よく山をスケッチしていたSさんのスケッチブックで指さしてもらおうと、一つ目のピークとのこと。これで日本側三人が納得した。しかし、実際に行ってみると、三角点の山頂は二つ目のピークであった。くい違いはSさんの絵に問題があるのか、それとも廖先生が一つ目

のピークの説明をしたのか、は謎となって残った。

説明を終え再出発。やがて国道を左に折れて隘路を山へ向かった。道は急坂で狭いがきちんと舗装してある。果樹農家とときどき現れ、民家が無くなると、やがて道路も尽きて「都蘭山」登山口に着いた。およそ標高600mくらい。

### ■いよいよ聖山へ

車10台くらい止められる広場と、木組みの新しい展望台があった。展望台の上で登山を終えたらしい若者2人がカップ麺を食べていた。彼らに軽く会釈してその展望台に登ると間近に青海が見え、曇り空と水平線との間に平らな島、台東市沖の太平洋に浮かぶ「緑島」が見えた。山腹の木々は青々とし、空気は暖かい。

すでに11:40で山登りには遅い時刻だ。廖先生の車には、切り揃えた竹杖が5、6本積んであったので、人を連れた山登りを日常的にしてる人なのだろう。麗雲さんとわたしがその杖を1本ずつ借り受け、廖先生自身は愛用の木の杖、微妙にねじれて味のある杖を使う。あとの2人は日本から持ってきた自前のストックを手にした。がっちりした体つき、温厚な廖先生を先頭に出発。

道は良く整備されていた。それもそのはず、「都蘭山」は少数民族(卑南族)の聖地だったのだ。卑南族は台東県付近に約1万人ほどが居住しており、独自の文化と言語を持っている。

台湾の少数民族というと、高砂族をすぐに思いつくが高砂族とは日統時代(日本統治時代の略、台湾ではよく使う略語、日抛時代ともいう)に日本が名付けた原住民族の総称だそう。今は「原住民族」と呼び2007年1月現在、台湾当局に公認されたもので13の民族がある(インターネット調べ)。

我々が登山した日も、卑南族とその関係者らしい人たち(廖先生に訊いたがはっきり分からなかった)が登山道整備のため入山していた。セメントをこねるための水入りポリタンクを担ぎ上げた、本格的なものだ。

登山口からしばらくは、ブルドーザーで轆いた跡がある林道めいた道だった。下山の子供連れ家族とすれ違ったので、安心して歩ける山であると確信した。この道を30分ほど行くと作業所のような小屋掛けが現れ、ブル道は終わりとなる。小屋は登山道整備の基地らしく、それらしい備品があったが、誰もい



「普悠瑪」の文字を彫り込んだ巨石。



行き届いた「水切り」の例。←の方向に流れる雨水の勢いを弱めるため小枝を並べてあった。

なかった。歩きながら、もしや山頂までブルドーザー林道かと心配したので、普通の登山道となってほっとした。

麗雲さんはしんがりについて、「初心者」を擁護するような位置を保っていたが、少しは我々の山登りの経験を認めてもらったのか、気を抜いた歩き方に変わった。だんだん傾斜がきつくなり、大きな照葉樹が茂るようになった。樹林の中の小道で暗い。林床のシダ類、梢の着床植物は、日本の山で見るより大きくたくましい。

11:20主稜上の鞍部に到着。ここで小休止。

主稜の向こう側は、切り立った崖になって落ち込んでいる。下を見ると植物が繁茂した傾斜地が、蛇行する河に向かって広がっていた。ほんの5分ほど休み、すぐに出発する。暗い林床に鮮やかなピンクの蘭が咲いている。少し進むと同じ花が次々と現れた。一株に五、六個の花を付けた、よく目立つ可憐な蘭だ。廖先生に問うと「根節蘭」であるという。だが帰ってから調べると「根節蘭」というのは属名で、種名ではなかった。

廖先生は元教員名だけあって、はなかなか博識があり、ときどき立ち止まっては植物や地形などを丁寧に説明してくれた。

#### ■卑南族聖地

15時20分、最初のピークに着いた。事前に調べた登山案内では「普悠瑪遺址」という場所だ。照葉樹のため見通しはない

が、中央の平らな場所にちょっとした広場があり、そこに先客たちがいた。彼らは輪になって歓談中の者や、座ってカップ麺を食べたりしていた。私が思うに登山道整備を終え、休憩中の登山路普請隊であろう。若者から壮年までの男女十数人だった。なかに日本語をすこし話せる三十男がいて、彼に日本から来たようなことを言って挨拶をする。どういった組織団体なのか良く訊いておけばよかったが、その時は「卑南族」のことは知らなかったの、なにも訊かなかった。

先客が休んでいる広場から東側の奥まったところ、日本の山なら祠があってもよいような感じの場所に、大きな丸石の重なりがあり、なかの一つの岩に文字を刻んだ記念碑があった。巨石に大きく「普悠瑪」という三文字が深く彫り込んである。そしてその文字が目立つよう、文字の溝を真新しい朱色のペンキでなぞってあった。卑南族の祖先をまつる石碑だと想うが、もともと台湾の「原住民族」には文字は無かったので近年の建立かと思う。

登山口へ向かう途中の公園で、廖先生が山頂と指差したしたところは、この石碑のある場所だ。ひねって想像すれば聖山「都蘭山」の山頂と、三角点のある最高点とは、別なのもかもしれない。そして「普悠瑪」と「卑南」とは同じ意味か？日本でも「明日香」と「飛鳥」などがあるし…。石碑の有る方が重要地点なのでこちらを山頂とする方が自然だ。廖先生の話しによると、この少数民族のなかには、日統時代の弾圧政策の怨念から、日本に対して反感を持っている人もいるとのことであった。直接本記事と関係ないが、日本へ帰ってから陳建年という歌手の曲で「故郷普悠瑪」というフォークソングがあるのを知った。

#### ■三角点の頂上へ

日本には、一等三角点の山をありがたがって登る人がいるが、台湾にも同類がいるらしい。それは登山案内に「一等三角点」などと断り書きがあるので、それと推測できる。「日本原点」という併記のある場合もあり、日本統治時代の設置ということも分かる。台湾の面積は九州より小さく、一等点の数は94箇所と少ない(日本は972点)。三角点とは何かというと、地形を測量するときの基準点で、等級が一等から四等までである。そのうち「一等点」とは、測量の基本をなす重要な基準点だが、近年は人工衛星による測量に進歩して、以前ほど重要ではない。

我々が目指す三角点のある山頂へ行くには一度下らなくてはならない。岩混じりの道、相変わらず樹林の道を降下した。ほとんど遠望は利かなかったが、ときに崖の縁を歩くと、海岸線で上下に分けられた海と陸地が見えた。

登山道修復班は丁寧な仕事をしていて。一例を挙げると整備のよい登山道には、雨水で道が削られるのを防ぐための溝、「水切り」を適当な間隔で作る。都蘭山の「水切り」は山腹に誘導した流水の勢いを弱める目的で、水切りの末端に短く切った小枝の束を置いてあった。こうすれば登山道から「水切り」を経由して流れた水が山腹を削ることはない。細やかな心遣いに感心した。

気候の違いでたまげたものを見た。尾根筋は風が強いので、根ごと横転した風倒木に出会うことがある。日本の風倒木は根こそぎ倒れると哀れ、乾いて枯れてしまう。ところがここでは湿潤で温暖なためか、倒れて野ざらしの根から幹が立ち上がり、立派に成長しているのを見た。もちろん枯れてしまった樹の方が多かったが。

廖先生の博物説明は随時続いた。これは家具にする樹(黒檀)であるとか、山脈の成り立ちなど。ことばで伝わらない固有名詞などはメモ帳に漢字で書いてくれた。ただし、わたしには植物の名前を書いてもらっても、もともと植物音痴なので「そうかい」と思うしかなかった。

都蘭山は登山口から山頂まで標高差600mぐらいなので、ラクチンだろうと気楽に構えていたが、登りくだりがあると、ひと汗かいてしまった。同行のA氏は最初からTシャツ1枚なので汗で黒ずんだ部分の方が多いし、Sさんも風呂上がりのような濡れた髪になっているがこれも汗でツヤが増したのである。かくいう私もかなりの汗。麗雲さんもそれなりの汗だった。しかし、台湾の登山者にとっては厳冬期なのか、アノラックをしっかりと着込んで重装備の人が多かった。街中でも羽毛服姿を見たので、ファッションなのかかもしれない。しかし寒いという感じはなく、私は油断して台東市の食堂で蚊に喰われた。

やがて、最低鞍部を通り過ぎ、登りにかかると、すぐに行く手を岩壁に阻まれた。「大石壁」という場所だ。

登山道は、「大石壁」の左下を回り込むのだが、廖先生は逆に右側の岩溝をおりて行った。そのわけは、都蘭山頂上は樹木



正月でも緑濃い照葉樹の中を行く。樹がかぶさり薄暗い。



見晴台から北方を望む。急峻な山脈が続き、高度感満点。

が茂り見晴らしが無いので、遠来の客を大展望がある「見晴台」へ案内するためだった。案内人がいなければ、知らずに通り過ぎてしまったろう。廖先生の背中を追って細い踏みあとを少し登ると、崖際に狭い露岩のテラスがあり、そこが見晴台であった。

眼下に広い氾濫原を持つ河「卑南溪」が蛇行し、西方は幾重にも連なる山なみ。玉山など3000m級の山々が「そろい踏み」の展望を期待したが、それらの山々は山腹八合目ほどの腰回りだけが見え、いただきは雲の中だった。それでも十分すばらしい眺望だった。北側は「都蘭山」もその一員である「海岸山脈」が岩っばい山稜をくねらせて横たわる。こちらは最高峰が雲底より低い1682m(新港大山)なので、すべての地形が見渡せた。東側と南側は樹林があり、展望は無かった。

元の登山道に戻り、階段などで「大石壁」の下を通過。名前ほどのところではなく、再び尾根上の道となった。

14:20、三角点のある山頂広場に着いた。まわりは照葉樹に遮られ、展望は無かった。山頂の標識、看板などは無く、途中でよく見かけた行程距離をかいた低い看板があるだけだった。

日統時代の三角点材質規格「日本小豆島産花崗岩」の立派な一等三角点はあった。台湾に花崗岩は無いのか？

山頂標識の代わりに看板があり、「3K+792 掌聲鼓勵鼓勵！ 恭喜你成功 Congratulations! Here you are!」と書いてあった。3K+792とは歩程距離3792mのことで、ずいぶん細かく測ったものだ。「掌聲鼓勵鼓勵」という中国語は判らなかったので、後で調べたら「ご苦労様拍手パチパチ」といったところらしい。記念撮影の後しばらく休み、往路を下山。廖先生の説明だと別の登山道が東西に1本ずつあるが難路だという。帰りは下りなので軽い足取りだった。

16:20登山口帰着。出発時刻が遅かったので、軟弱登山隊としては、往復とも普段より少し早めのペースでだった。段取りをしてもらった「CT 溯溪会」、同行していただいた麗雲さん、案内の廖先生に感謝。終日曇り空だったが、雨が降らずよかった。車でホテルまで送ってもらい、廖先生とはここでお別れした。

#### ■台湾式歓待

台湾では、ほかに観光地もまわったのだが、日本でもよく知られている場所なのであとは省略。

「CT 溯溪会」の本拠地の台北へ行くくと荘会長から歓待された。「満月圓」という溪谷にある「CT 溯溪会」の新人登龍門の滝(新人が登る滝)や、観光地でない温泉、老舗料理店などを彼の車で案内してもらった。台湾式の歓待は、予備知識で知ってはいたが、体験は初めてで至れり尽くせり。この年の正月は、日本からほかに3隊(こちらは本格登山と沢登り)が来て、すべて荘会長にお世話になった。彼らが下山後は、私たちにしてくれたように連日の歓待で荘さんは過密接待だ。私は日本を代表してお世話になったような心もちになり感謝、恐縮であった。

「台湾百岳」をすべて登るのは、アプローチ、山の大きさ、山小屋の設備などを比較すると、日本の「百名山」を登るよりはるかに困難だ。荘会長は「台湾百岳」をすべて登り、次の課題として、沢登りに挑んだという。「沢登り」とは日本で発展した登山方法である。大衆登山の黎明期は登山道のない山が多く、先人登山者は藪を避けるため沢筋を利用した。その後沢登りを専らとする人たちが現れ、彼らは滝を積極的に登攀する。台湾での沢登り(溯溪)は荘会長らが先駆者だろう。冬を考えると日本の沢は、氷雪に埋まってしまうが、台湾では雪がないので、冬でも沢登りが可能だ。

荘会長も初期のころは日本と同じで、足ぶしらはワラジ。台湾ではワラジは棺桶をかつぐ人が履くもので、売っているところは葬儀屋だという。荘会長は毎週のように大量のワラジを買い占めるので葬儀屋が訝しがり、「おまえのところは、大家族で毎週葬儀がでるのか？」と言われたとか。今回同行した年長者のAさんにこのことを話すと、自分の田舎も土葬していた頃は、棺桶をかつぐ人はワラジを履いたそうだ。帰国してこの件を、いろいろな人に訊くと、都会ではそういう風習は無かったという人が多かった。(完)